学苑・日本文学紀要　第九三九号　七八～九四（二〇一九・一）

尾崎紅葉の死
―その前後（一）―

吉田昌志

はじめに

伊藤整の『日本文壇史』第七巻（講談社、昭和三十九年六月十日）は、明治三十五年末の夏目漱石の英国留学からの帰朝に始まり、日露開戦の三十七年までを扱っているが、明治文壇におけるその「目まぐるしい変化」のうちの、

> 最大の事件は尾崎紅葉の死を頂点として、硯友社と、それに同伴する文学者たちの間に保たれた文壇の情勢が一変することである。（「はしがき」）

と捉え、紅葉の死を「一時代の終末の象徴」である、としている。このような把握におそらく異を唱える者はいないだろう。

右の認定に応じて、「紅葉の臨終と葬式」（第八章第二節）は十五頁に及ぶ詳細な記述をもち、その最後に、葬儀へ列した「田山花袋は、古い時代が尾崎紅葉とともに埋められることを感じて、夜が明けたやうな気持になつた。」と記して章を閉じている。

この締めくくりの言葉の前に、花袋の『東京の三十年』（博文館、大正六年六月十五日）の一節を引いて叙述の裏づけとしていることが示しているように、本書の記述は、巻末に掲げられたあまたの参考文献に基づき、当然ながらそれらを読み込んだ伊藤整の史的な把握が加えられて成ったものなのである。

「文壇史」である以上、時を経て一定の整序がなされた文壇関係者の叙述を重んじるのは当然ながら、そのいっぽうで「一時代の終末の象徴」たるできごとに立ち会いたいと思う者にとっては、いささか物足りないところがあるのも否めない。というのは、当時、紅葉をめぐっては実におびただしい数の新聞雑誌の記事があり、各紙誌が彼の病勢や臨終から逝去、葬儀にいたるまでの報道を競い合っていたからだ。それほどに紅葉の存在は大きなものであったわけだが、そうした報道の実態に即してみたいという思いを禁じえないのである。

幸い、晩年のこの時期は紅葉自筆の日記「十千万堂日録」が残されており、また定本ともいうべき岩波書店版『紅葉全集』（全十二巻別巻一、平成五年十月二十一日―七年九月二十七日。以下『紅葉全集』あるいは『全集』と記し、巻数のみを示して、刊記を省く場合がある）も備わっていて、書簡をはじめとする基礎資料によって『日本文壇史』の記述を補足することが可能である。

紅葉歿後の経緯については、かつて「紅葉「以後」覚書」（岩波書店版「新日本古典文学大系 明治編 月報17」平成十七年一月〔発行日、記載なし〕）に述べたことがあるが、紙幅が許さず、文字通りの「覚書」に止まり、意を盡せなかった。また紅葉門弟の筆頭である泉鏡花の「年譜」（同『新編泉鏡花集』別巻二、平成十八年一月二十一日）を作成した際、さらにその後の「補訂」（本誌「学苑」に十八回まで断続掲載中）においても細説を試みてきたが、いまだ十分とはいえない。そこで本稿では、以後の調査や原資料をふまえて、尾崎紅葉の逝去前後の様態をできる限り再現してみる。ほぼ時系列にしたがって以下の節を立てたが、叙述の都合上、多少の先後や重複が生じる場合もある。

一　「読売新聞」の退社

内田魯庵が「紅葉が多年の牙城たる読売を棄てゝ二六に移つた時は、一葉落ちて天下の秋を知るで、硯友社の覇権が傾き出した第一歩であつた。」（『きのふけふ　明治文化史の半面観』博文館、大正五年三月五日）と述べるごとく、紅葉の晩年期において社会的に最も大きな転機となったのは、「読売新聞」の退社である。それは作家の創作力の決定的な衰耗を周知せしめるとともに、紅葉にとっては社員としての定収入の途絶をもたらしたのであった。

『日本文壇史』をはじめ、その退社の事情を語るのに最も多く引かれるのは上司小剣の『U新聞年代記』（中央公論社、昭和九年三月二十一日）である。良く知られる文章なので全文の引用を控えるが、

月々百円づゝの月給を払つて、一年も何一つ書かぬ紅葉を、社長は『不埒々々』と罵つてゐた。ある月末、尾崎の使が社の会計へ月給を取りに来ると、その袋がない。（…）『尾崎さんの月給は鳥居坂（本野邸）にある。紅葉さん自身にあつちへ取りに行つて下さい。』（…）このことあつてから、社長と紅葉との大衝突となつたが（…）石を坂路に転がすやうな勢ひで、誰れも止め手がなく、紅葉の退社といふところまで落ち込んでしまつた。主筆と同額の月給六十円を二三年前に百円とし、社中随一の高給を与へたのを、社長はよほどの優遇だと信じ、尾崎の方でもつと折れて出ると思つてゐたらしかつた。

とのことである。本書の前書には「全篇にユウモアを発散させるつもりで、戯曲類似の形式を採つた」「言はゞ変体の追憶記」とあり、また刊行当時の広告には「モデル小説」と銘うたれているから、右の記述を全くの事実の報告とみることはできないにしても、「社長」本野盛亨の新聞社内部に身を置いていた作者ならではの叙述として尊重に値しよう。

この退社の一件はいつごろのことなのか。紅葉「年譜」（『紅葉全集』第十二巻）には明治三十五年の「夏、病気に苦しんだあげく、読売新聞社を退社した。」とあるが、時期をさらに絞り込むことのできる手がかりがいくつかある。

その第一は、『紅葉全集』未収録の三田村玄龍宛書簡である。歿後の「俳藪」（二巻六号、明治四十年三月二十三日）誌上に「紅葉山人書翰」として翻字紹介されたもので、未収録ゆえ、左にその全文を掲げてみる。

拝呈先日は玉稿御遣しに相成ルビ迄御手数を労しながら編輯所より近来の附録の体裁にてはちと不向とて返し来り候へば無是非御返送申上候不悪御思召被下度候内一篇「恋の欲」の考証甚だ感じ候へば乍専断俳藪（ママ）紙上に横取り致候間御諦め被下度頼入候別封近刊の分差出候へば御覧被下度是も次号より

は文藪と改題致し小生一手にて編輯致候事に相成即ち門下の同好的雑誌と致し逐次発達致候心底に候へば今後折々御寄稿相願御助勢の義頼上候事に御座候

未だ発表不致義に候へども小生去月社長と衝突の上日就社を退き申候間一寸御通知申上候余は又々可申述候草々

八月六日　　尾崎徳

三田村老台

宛先人の三田村玄龍（本名泰助、後に鳶魚と号す）と紅葉との関係については後節に詳しく述べるが、彼の送った原稿のうち、「恋の欲」の考証を「俳藪」誌に掲載するむね伝えた末尾に、退社のことを報じた内容である。翻字で「八月六日」の日付のみが示されているが、文中、雑誌「俳藪」から「文藪」（紅葉歿後に再び「俳藪」となる）への改題に触れている条が、『紅葉全集』収録の明治三十五年八月六日付豊田勇三宛書簡の「俳藪の義次号よりは文藪と改題致し小生引受け編輯致候事に相成」云々と全く一致するので、発信の年次を三十五年とすることができよう。紅葉は同年の八月六日に三田村、豊田の両名に書信を認めたのである。

もって、右の三田村玄龍宛の書簡により、「読売」退社の時期を「夏」（年譜）のうちの「七月中」とすることが可能になる。

では、「読売新聞」との関係は七月の何日までなのか。紙面を検めると、七月十二日付の創刊九千号記念の十八面に「九千号の賀」と題して、「さらに上る一層樓の月すゝし」の句の自筆版が載っており、また俳句欄では紅葉選の「読売十句粋」の第七十七回が七月二十四日付（五面）に載っているから、紙面上ではこの二十四日を限り、ということになる。

手がかりの第二は、当時逗子に滞在していた泉鏡花宛の書簡で、八月二十六日付発信中に、

昨日の万朝に小生退社の報を出し候　あすこはいつも素早き事感心に御座候

〔圏点は原文〕

とあるのにしたがって、「万朝報」を見ると、八月二十五日付（二面）の「文壇消息」に、

尾崎紅葉は先月限りにて読売新聞社を退きたり

と出ており、七月を限りとすること、紅葉の言葉通り、他紙に先駆けての「素早き」報道であった。

これに続いては、「新小説」九月号（七年九巻、一日発行）の「時報」欄に、

▲尾崎紅葉氏　は、今般都合によりて読売新聞社を辞し暫らく閑地に就きて清遊せらるゝ事となりたり、されば従来読売紙上に掲載したる金色夜叉の続編は、自今以後本誌に登載する事となりたれば、本誌が更に一段の光彩を添えて読者に見ゆるの日は近きにあるべし。

と報じられるとともに、本号目次のあとに「金色夜叉写真募集」の広告が載った。

写真の「風景は野州塩原山中に限る」、「但し全所渓流を現すべし」、「図中に人物を添ゆべからず」、「時季は四月より九月の間なるべし」等々の細かい規則を示したうえで、十月末を締切とし、当選者へは「懸賞金拾円」を呈するとともに、その写真を金色夜叉の続々編新刊の巻頭に掲げる、という企画である（結果、翌三十六年六月十二日刊の『続続金色夜叉』の巻頭に

は加瀬翠無撮影の当選写真が掲げられた)。

この募集広告は、爾後「新小説」春陽堂が読売から「金色夜叉」を引請けたことの広宣でもあった。

かくして「新小説」九月号発行の二日後の「読売新聞」(九月三日付・二面)の「社告」に、

社員紅葉山人尾崎徳太郎氏は両三年以来宿痾の為め専ら療養中なりしが経過捗々しからざるの故を以て退社の上暫く閑地に就かるゝことゝなりたり

と告知せられ、退社が公のものとなった。

さらに、五日発行「太陽」九月号(八巻十一号)の「文芸時報」欄に、

▲多年「読売新聞」に盡瘁せし尾崎紅葉子は七月限りを以て同社を去れり

と伝えられたのが雑誌の速報であった。

「十千万堂日録」によると、読売(日就社)からの俸給の受取りは毎月一日で、この七月一日にも「十時車に駕して日就社に受俸し。転じて樺嶋に趣く」とある。「樺嶋」は喜久夫人の実家であるが、これが最後の「受俸」となったわけである。

以上の経緯から、紅葉の読売退社は、七月中には決定しており、八月下旬以降の紙誌の報道により、漸次周知のものとなっていったのは明らかであり、九月三日付の「社告」は新聞社側のいわば最後通牒だったことになろう。

もって、大学在学中の明治二十二年十二月の入社以来、在籍十二年と九か月、あまたの傑作を載せて創作活動の枢軸となり、紅葉の文壇における地位を重からしめた新聞社をついに去ることとなったのである。

しかし、さらに言えば退社の一件は、つとに三十三年の時点で胚胎していたことが、歿後の「新潮」(五巻三号、明治三十九年九月二十日)誌上に掲げられた紅葉自筆の「退社届」の存するのによって確認できる。

これは同誌が紹介した紅葉「日記」(のちの「十千万堂日録」)の末尾に掲げられた写真版で、『紅葉全集』第十二巻の翻字によると、

御届

今般因一身上之都合無是非及退社候此段御届申候也

明治卅三年

十二月十五日

尾崎徳太郎㊞

日就社長

本野盛亨殿

となっている。『紅葉全集』の「解題」は「退社届提出の経緯やその扱いについては未詳」としているが、右の「届」と同日の巌谷小波宛書簡(当時は在独。明治三十三年十二月十九日付)中の、

小生は例の漫(ママ)性胃病の処、日就社と待遇上の事にて大衝突を生じ九、十、十一、の三ケ月間俸給を受けず本月に及びて不平勃々辞表を呈し候を高田、市島の二氏中に入りて金色夜叉の完結まで虫を怺(こら)へる事に相成候

と述べている条に、三か月の俸給停止ののち、高田早苗、市島謙吉の仲裁で退社を思い留まった「経緯」は詳らかである。

この「退社届」が書かれたのは、あたかも「続々金色夜叉」の「(六)の九」が載った五月二十八日以来、実に六か月ぶりでその「(七)」が十二

月四、五、六日と連載を再開したのち、またもや休載となっていた時期にあたる。小波宛書簡に記すごとく、「九、十、十一、の三ケ月間俸給を受けず」、「待遇上の事にて大衝突を生じ」た原因は、かかってこの半歳に及ぶ休載にあったわけである。

しかし、紅葉は年明けて三十四年一月二十二日の「十千万堂日録」に、次のように記すところがあった。

余の新聞社に入りて茲に十星霜、然れども此の続々金色夜叉を草して本年に入りたる如く、休筆の連(しきり)にして、詩思無きにあらざれど、筆を執るの気を発せざるは、未だ曾て有らざる所也。日就社に対して深く疎狂放恣の過ぐるを愧づ。

「退社届」を書いてのち一か月余のこの思いにおそらく偽りはないであろう。かかる焦燥と慚愧は病勢の進むとともに募り、また休筆の続く限り新聞社との軋轢は避けがたく、以後足かけ三年に亙り、三十五年九月の「社告」に至ったのであった。

二　「二六新報」入社

「読売新聞」に退社の「社告」が載ってから三十三日後の十月六日付「二六新報」の第一面上段に尾崎紅葉署名の「入社之辞」が掲げられた。周知の文であるが、以下に全文を引用してみる。

予が多病の故に、十余年の締合密なる読売新聞と絶つて、未だ幾くならぬに、二六新報社は予の親友某々の二氏を介し、不肖の為に厚遇の椅子を払つて、懇に招かるゝのであつた。

予は嬌々の名にし負へる二六新報社長として、秋山定輔氏を今日に知るのみならず、夙に東京大学予備門の学友として善く識るのであつたから、其人の招聘を受るは尤も望む所であるが、予は先づ問はざるべからざる者有るが故に、之を以て氏に答へた。

曰く、足下は予が声名を買ふの乎、或は、箇の病骨を買ふの乎。秋山氏は曰ふ、固より其病骨を買ふのであると。奇なる哉、言や。予が入社の意は之が為に愈よ動いた。

然るに、予の友に諫むる者有って、二六新報は形の如き非文学的新聞、而も権勢の畏迫の下、其筋の忌憚の前に、直言縦筆して自ら雄とする危地に居る者、決して文学者の楽み且安じて籍を置くべき処でないと云ふのである。

予は退いて意(おも)ふに、其の多難孤守の二六新報社が、何の暇ありて、其の常に尚ばざる文人の病骨を扶け入るゝのである乎。

奇なる哉、事や。予は始に其言の奇なるに感じ、今又其事の甚だ奇なるを喜び、寧ろ此謎の鑰(キイ)を獲んが為に、則ち意を決して入社した。

然れば、此鑰(キイ)を獲んが為に、今よりして後予が如何に自ら処する乎は、要するに、読者諸君の紙上に見たまふべきものであらう（十月二日稿）

この「入社之辞」は、その後続けて「太平洋」（三巻四十二号、十月二十日発行）、「新小説」（七年一巻、十一月一日発行）、「文藪」（三号、十一月十日発行）と三つの雑誌に再掲されて世に広まった。

「読売」退社より「二六」入社まで一か月という短い期間は、入社の交渉がかなり以前から進んでいたことを窺わせるに十分である。退社の際に「読売」の本野社長が「尾崎の方でもつと折れて出ると思つてゐたらしかつた」（先引『U新聞年代記』）にもかかわらず、そうしなかったのは「二六」

との内約がすでに成立していたからであろう。

入社の仲介者の「予の親友某々の二氏」とは、社長秋山定輔と昵懇だった長田秋濤（本名忠一）と、当時「二六新報」に在籍していた堀紫山（本名成之）とであった。紅葉との知遇は紫山のほうが早く、紅葉の大学時代の二十三年から、秋濤とは二十八年前後からと言われている。

堀紫山（慶応三年十月二十三日生、昭和十五年三月十六日歿。文久三年生れトモ）のことは、「二六新報」の前に在籍していた「読売新聞」創刊九千号記念（明治三十五年七月十二日付）の特集記事「多年我社に盡力せし人」（三十一面）に、

君は常陸下館の人、父祖世々弓術を以て名あり、年少東京に出でゝ文を学び後我読売新聞に入りて『三面記事』に健筆を揮へり其文艶麗嬌冶姿態淋漓柳北以後第一人と称せらる而して君の文を行る達筆流るゝが如く人其健腕に驚かざるはなし、明治二十八年の頃一時大坂に赴き後再び帰社し三十年を以て退社せり齢三十八、紫山と号す。

と出ているのが参考になる。「二六新報」在籍には触れていないが、「東京朝日新聞」明治三十六年十一月一日付（五面）の訃報「尾崎紅葉氏逝く」の文中には「昨年七月（ママ）二六新報の聘に応じて堀紫山氏と共に同社に入り」云々との記述がある。紅葉入社は十月の間違いだが、この「七月」は紫山の入社時期を示しているのかもしれない。

両人の縁は、明治二十三年十月、牛込北町の祖父母荒木の家から大学近くへ転じた紅葉と本郷森川町（一番地二九七号）に同宿したのが始まりで、これをもって紅葉門下の最初の一人とされるほどである。「新小説」（八年十三巻、明治三十六年十二月一日）の紅葉追悼特輯「紅葉山人追憶録 第四」（以下、この「追憶録」については、誌名、巻号数、発行日の記載を省く場合がある）の後藤宙外の語るところによれば、「春陽文庫」（明治三十年六月二十日―三十一年六月十日、全十編）は表むき紅葉編輯主任となっているが「実際の編輯は今『二六』社に居る堀紫山君がやって居った」とのことである。

紫山には妹が二人おり、上の妹美知子は堺利彦の妻、下の妹保子は大杉栄の妻となった。知友上司小剣を当時「読売」にいた紫山に紹介し、入社を頼んだのは堺利彦だったという（黒岩比佐子『パンとペン 社会主義者・堺利彦と「売文社」の闘い』講談社、平成二十二年十月七日）。

長田秋濤（明治四年十月五日生、大正四年十二月二十五日歿）は、中村光夫が『贋の偶像』（筑摩書房、昭和四十二年六月二十五日）で小説化して知られる、逸話の多い人物であるが、静岡西草深生れ、父銈太郎は直参旗本、幕府の命で渡仏後新政府では外交官を務めたが、二十二年四十歳で病歿した。

二十年三月、秋濤は十七歳のおりすでに翻訳『脚本ハ仏国世界ハ日本当世二人女婿』（鳳文館）を出版するなど早熟の才を示し、父の歿後に渡英、さらに渡仏して、帰国後は父の門人下田歌子の媒酌で結婚、仏国での観劇体験に基づき、福地桜痴らと演劇改良をこころざした。

二十八年二月、桜痴と計って芝紅葉館で「脚本改良会」を開催、「その時の参会者の中には紅葉の顔も見えているから、このころすでに紅葉との交友があったとも察せられる」（『近代文学研究叢書』第十六巻、昭和女子大学光葉会、昭和三十六年二月二十日）のであるが、交友の始まりは堀紫山ほどには明確になっていない。

秋濤は明治三十年伊藤博文公の秘書格となって欧米随行し、帰国したあとで、フランス文学の移入紹介、翻訳劇の川上音二郎一座への提供、陸軍

大学校、東京専門学校への出講等、明治三十六年頃までの活動にはめざましいものがあった。巌谷小波宛の紅葉書簡（明治三十五年三月十七日付）に、

秋濤子は来月より三井の早川千吉郎の幕僚と相成月俸二百五十円何か奢らうかと前触盛なるものに御座候。

と伝えられるほどに意気旺んであった。

翻訳の代表作は、「万朝報」連載中に発表禁止となったデュマ原作「椿姫」（明治三十五年八月三十日―十月九日。初刊早稲田大学出版部、三十六年五月四日）のほか、紅葉との共訳「寒牡丹」（「読売新聞」明治三十三年一月一日―五月十日、初刊春陽堂、三十四年二月六日）もあり、紅葉の療養費の扶助のためユーゴー原作「ノートルダム・ド・パリ」を『鐘楼守』（早稲田大学出版部、明治三十六年十二月十八日）として紅葉とともに訳出せんとしたが、生前には完成しなかった。かつてのマリヴォー原作「愛の偶然とたわむれ」の翻案「八重だすき」（「読売新聞」明治三十一年六月五日―九月三日）に際して秋濤の助力があったとする説もあり、紅葉の訳業にとって無くてはならぬ存在だったから、「二六」入社にもまた盡力するところがあったのである。

このほか、明治三十二、三年の交には、高田早苗の提唱したいわゆる「文士講談会」のメンバーとなり、そのうち川上眉山宅で催された硯友社主体の小説口演会（明治三十三年三月十一日）では、江見水蔭、泉鏡花、巌谷小波に続き、紅葉「茶碗割」口演の前に「血髑髏」と題する話をしている（詳しくは拙稿「泉鏡花「年譜」補訂（十六）」「学苑」九〇三号、平成二十八年一月一日を参照）。

「二六新報」との関係は、社長秋山定輔のブレインだったことに因るもので、村松梢風『秋山定輔は語る』（大日本雄弁会講談社、昭和十三年十一月八日）中の、三十五年国会議員となった当時のことを述べた条に「其の頃、林田雲梯、長田秋濤、高田半峯、の諸君と我々共は度々紅葉館だの赤坂あたりでよく同席して飲んだものだった」とあり、両者が親密の度を増した時期と紅葉の入社斡旋の時期とは符合するのである。

また病気療養のため明治三十五年九月十四日付で「二六新報」を罷めた伊藤銀月の「黒岩周六と秋山定輔」（「新声」九編五号、明治三十六年五月十五日）にも「黒岩周六の賓客に内村鑑三あり、秋山定輔の賓客に長田秋濤あり」、「互に利用さるゝを知りて利用する也」としており、両者の関係は周知のものとなっていたごとくである。

秋濤の翻訳の口述筆記の助手を務めたこともある徳田秋聲が、秋濤の日常は「締りのない」、「非常な不規律な生活であつた」し、その「ルーズな生活が何だか自分を散漫にするやうで堪へられなかつた」ため、「逃げるやうな風で長田氏の家を出てしまつた」（「わが文壇生活の三十年（其二）」「新潮」二十三年三号、大正十五年三月一日）と述べるように、奔放豪恣、無軌道な生活ぶりで、彼から離れる者も多かった。

紅葉と同じく親交のあった高田早苗は「長田君は磊落といふ点になると殆んど無類で、又其の天然の愛嬌といふものは、是れ亦私の交友中には迚も匹敵する者がなかつた」、「随分磊落過ぎた行為があつたけれども、他面友人に対して極めて親切な情の深い処もたしかに有つたのである」（『半峯昔ばなし』早稲田大学出版部、昭和二年十月三日）と回顧しているが、紅葉の「二六新報」入社にも、この友人に対する「親切な情の深い処」が発現したのであったろう。

さて、紅葉の入社最初の仕事は、懸賞（「謎々」と「ものは」盡しの各十二

題）の撰者を担当することだった。「入社之辞」から五日後の十月十一日にまず紅葉の名が発表され、十七日に理学博士坪井正五郎、二十二日に法学博士和田垣謙三が追加され、三名の撰者が揃って、翌十一月三日から八日まで六回にわたる「当選披露」となった。

しかし著作年表を見れば明らかなように「二六新報」への作品の発表は「列信具作　紅葉山人訳」（レッシングの喜劇「ミンナ・フォン・バルンヘルム」の翻訳）の「草分衣」（三十六年一月十五日―二月二十四日。三十六回で中絶）のみであったのは詮方ない。読者は、創作よりもむしろ「病骨」の紅葉の動静の詳報を本紙によって知ることになるのである。

三　大学病院入院

紅葉が大学病院へ入院したのは、明治三十六年三月三日から十四日までの十二日間である。

入院前後の経緯については、「新小説」の紅葉追悼特輯「紅葉山人追憶録 第七」の泉鏡花と小栗風葉の発言が最も具体的であり、また紅葉の文章では「入院」（歿後刊行の『紅葉遺文』隆文館、明治四十三年一月一日、に収録）と「病骨録（其一）退院前五日」（同じく『病骨録』文祿堂書店、明治三十七年三月一日、に収録）にその当初と最後とが縷述されており、これらに拠って入院の様態を窺うことが可能である。

また上記のほかに、入院の日取りに関する、主治医入澤達吉宛の書簡があり、『紅葉全集』に未収録なので、まずはこの紹介から始める。

本簡は星野麥人「紅葉忌」（「木太刀」三十六巻十一号、昭和十三年十一月五日）の中に引用されたもので、

拝啓
先般御高診を蒙り奉拝謝候　其後病状変動無之候へ共便通稀なると消化不良との為に不相変難渋罷在候
扨岡田氏より御話相願候通来月二日より入院の事に決心致候に付ては今後別而御配慮相願度と存候　然処入院の手続一向不案内に御座候がそれ迄に病院に参り掛員に交渉可致必要有之候事とは存候へども或は尊台より一言其旨被仰付候はゞ別に手続を要せず二日に突然参り候て差支無之やもしさやうに御座候はゞ甚だ勝手の申條に候へども此方の都合は尤もよろしく明日にも其向へ御声がゝりを願ひ度と存候
乍略義右書中を以て御伺申上度余は拝顔の上可縷述仕候
二月二十七日　草々不盡
尾崎徳拝
入澤国手
座下

とあり、入院予定日の連絡のみならず、病院内手配の懇請に、入院を控えた紅葉の緊張と不安を窺うことのできる文面である。文中に名の出る「岡田氏」すなわち岡田朝太郎宛書簡（『全集』収録、同年二月二十五日付）では、「段々御配慮相願候入院の義は来月一日と相定め候に就ては入院の手続等も可有之その事など伺ひ度」云々とあって、入院の紹介者が当時帝国大学の教授だった岡田であることが判るとともに、二十五日時点では、三月一日の予定だったことも知られる。

岡田の紅葉歿後の談によれば、入院前の二月二十二日に診察をした入澤博士から、翌日に「どうも自分は胃癌だと思ふ」との診断結果を聞いて一

驚、これをただちに巌谷小波へ伝え、紅葉に入院を勧奨し改めて検査の結果を俟ち、退院までは博士の診断を当人に告知しないことにした、という（「故尾崎紅葉君追慕演説」「新小説」九年一巻、明治三十七年一月一日）。

紅葉が自記した「入院」では、このかんの推移が、

予が入沢博士の言に聴いて、既に先月の二十七日入院の事と略極つたのであるが、いつそ月が替つてからと、一日に改めた所、朔日から縁起でもないと、家人に止められて、又二日と成つた。然るに、老人のいふには、二日は丑の日、此日には事が長引く、たとへば病人の床に就くのも今日は忌ぶのである。忌はしい事だと切に止められて、又延して三日に成つた。

とまとめられている。先の入澤宛の書簡は、当初の予定日に、岡田との間に成った変更を報せるものだったわけである。かくして、初めの二十七日から、三月一日へ、さらに二日、三日へと三たび変更のうえ入院が実行されたのであった。

些細な経緯に過ぎないかもしれないが、通院ではなく、大学病院で本格的な検査を受けるための入院は、紅葉自身とその家族に相応の圧迫を強いたといってよい。

続いて、前記鏡花、風葉、弟子の側からの証言を確認してみる。

できるだけ談話の言葉を活かして事情をたどれば、鏡花が入院のことを紅葉の口から初めて聞いたのは、「二月の初旬、恐しく寒い日」、「藁店の理髪店」が済んでからのことだった。「御重体であるとこと（ママ）は思ひも懸けず」、入院して「規則正しく食物を召上つたら日ならず御全快になりますと申して喜びました」。「入院が三月三日」で、「当日は、玄関に居る者、並に小栗も行き私も行き」、手回り品の「殆ど門弟の二軒分合せた位の所帯道具」とともに病院へ送って行き、先着していた徳田秋聲が病院でこれを迎え、「病室へは何でも十四五人ズラリトと列んだ」ものである、と述べているが、紅葉筆の「入院」では、「家を出たのは二時過で」「稍三時病院に着いた。病室は第二内科室一一の側九号といふので、北向の十二畳約の大さで、其の中央に臥床を置いて、内には秋声、斜汀、春鴻、水葉、吟葉がはや詰めて居る」ところであった、とある。

再び鏡花の語るところによれば、診察のため肌脱ぎをしたところ「其の様子は殆ど五十位の人の体格であつた」のに皆驚き、「それから五日ばかり経つて」帰宅すると、看病に行っていた弟の斜汀が「今までの試験では、どうしても胃癌たるを免れない」が、「皆なに心痛させるのも宜くないから、先づ余り騒がない方が宜からう」との巌谷小波の助言を伝え、これに従って、友人への報せは控えた。患部切開の相談の際は、門弟の中から誰か立ち会え、とのことで「日ならず、其の通知が来たから、已むを得ず、夜遅く、十一時頃に小栗の門を叩いて、始めて話をした」のだった。

これを承けて小栗風葉は、「泉がそれを知らして呉れるまで私も知らなかつた」が、その翌日「癌を切開するかしないかと云ふ会議が、友人及び吾々門下一同の間にあつたので、桜田会館へ集つた」結果、「何分衰弱して御居でになるから、切開すれば其の場で危ないと云ふので、兎に角切開しないことに話を決して、其の月の十三日に退院をなすつた、尤も退院前に医者から胃癌と云ふ宣告が先生にあつた」のだし、先生もいざという時の覚悟はすでに出来ていた、と語っている。

『紅葉書翰抄』（博文館、明治三十九年一月二十三日）の冒頭には、明治三十六年三月十日と十一日付の尾崎喜久宛（現存三通のうちの二通）が収められており、いずれも病室での感慨を夫人に書き送ったものだが、十日付に

「病院に居る中に何か入院中の事を書き一冊にまとめて小さき本を出したしと考へ居いろ〳〵工夫いたし居候」とある。「入院」と「退院前五日」は、こうした「考へ」のもとに草された文章なのであった。

入院後いくつかの「試験」（検査）を受けた紅葉は、退院の当日十四日に診断の結果を聞くことになるのだが、最後の五日間の消息を自記した「退院前五日」は、見舞客、病院内のありさま、看護婦、医師とのやりとりが叙されている、口語主体のきわめて刻明な文章で、柳田泉が、

これをそのまま、単なる感想録でなく、短篇小説と見ても、頗る面白いものたるを失はない。（…）文章の上からいつても、紅葉の言文一致としては、頂点に立つものであらう。文章体の痕跡があるといへばあるが、その痕跡がまた一種の面白さとなつて、この文章の特色の一つをなしてゐる。（「解題」中央公論社版『尾崎紅葉全集』第九巻、昭和十七年九月十五日）

と評しているのに相違なく、行間に診断を待つ紅葉の心境が滲み出ている。

三月十日

入院後は日として朝より来訪者の跡を絶つと云ふ事なかりしに、此日の午前に限つては、一客も来ざりしゆゑ、予は心静に読書した。

と始まる文は、

看護婦は室内を掃除する気勢、と思ひつゝ漸く目覚むれば、はや人も居ず、時計を取つて見れば七時を過ぎた。室の真中には、バケツトに水を湛へて、予が朝々の冷水摩浴の支度は出来て居る。

又長く煙を噴いて白壁に映ずる春日の澹蕩たるを打矚りつゝ、予は全く好睡を得て、夜前の愁無き人に覚めたのである。

越えて三日、十四日の午前九時半、入沢博士は自ら来つて、其の断症試験の結果を告げ、而して去るに臨んで、

「私の誤診であることを希望するのです。」

をもって終る。紅葉の心中は察するに余りあろう。「退院前五日」とともに『病骨録』に収める「生死論」や「観月」の感懐と覚悟は、すべてこの日の診断を受けてのちのものである。

後年、伊原青々園は、三月十四日に小栗風葉から「先生の病気は胃癌といふ事に極まりましたが、まだ先生にも世間へも秘密です。」と語られた、と回想している（「劇評家としての三十年の〔七〕」「新演芸」四巻九号、大正八年九月一日）。しかし、病名は「秘密」のものとはならず、青々園が風葉から病名を聞いた当日の十四日付「二六新報」（三面）の「尾崎紅葉氏の病状」には、

本社の尾崎紅葉氏は数年来の胃疾痼を成して荏苒癒えず遂に本月一日を以て帝国大学第一医院に入れり主治医は入澤博士にして佐藤博士（三吉）等亦往て診せり氏の病は癌腫なりや否や某博士は善良性の其なるべしといひ某博士は否といふ而して主治医は未だ断言せず今や病種の試験中に属するなり（…）◎氏は治療の都合より大いに体力を養ふの必要あり永く病院に在りては常に訪客に妨げられて摂養を害するの虞あるより本日午前一先退院して水清く風暖かなる静境に遊びて心身を養ふ筈なり雨々風々氏が胸臆の琴線に触れて奏し出せる文章は時々本紙上に現はるべし

と報じられている。記事では胃癌であることよりも、その「善良性」であ

るかどうかが問題とされている点、注目すべきである。

翌々日十六日（三面）の続報「紅葉山人の消息」には、「主治医入澤博士の断症に依りて終に胃癌と決したるは社同人の悲む所にして今後の摂養宜しきを得んこと切に祈る所なり」として、主筆福田和五郎宛の紅葉書簡を転載している。その一部を写せば、

扨本日午前十時卅分退院仕候、之より一時間前、入澤博士より在院十日間の断症試験に就て、始て結果の報告を受け候処、運拙くも彼の腹内の腫瘤は、セントヘレナの古英雄をも殪せし不治の胃癌と相極り申候、来山が「花咲いて死にとむないが病かな」の今更如何にとも為んやう無之、但強ひて申さば、不幸中の幸は、良性との事に候へども、早晩之が為に殪るべき天命と覚悟せざるべからず候、（…）

而して病処に一刀を下すべきや否やは、唯今胸中の大問題に有之候、従面一日も摂生を忽にすべからざるわれ物用心の身に候へば、当分百事の累を抛ち、来客の煩を絶ち、静養第一に心掛可申と存候、委細は又々可申上、其内病骨録と題し候て、はかなき日記なりとも入御覧可申候、入院中僅に一句致候、

何はさて命大事の春寒し　　病葉生

三月十四日夕

福田学兄　座下

〔圏点は原文。活字の大きさは均等とした〕

と認められている。小西来山の句を引きながら、末尾に自句を添えているが、退院の時刻と、その一時間前に「不治の胃癌」との診断の結果を知らされたことが判明するとともに、それが「良性」であると伝えられたことも十四日付の報道を裏づける内容である。

末尾の一文を受けて、三月三十一日（一面）には「予告」として、牛門逸人「我観新聞」、紅葉山人「病骨録」、緑雨「大底小底」、黙房主人「万里長征　娘子軍」の四篇の「評論、随筆及事実譚」が掲げられたが、「病骨録」の掲載は実現しなかった。

さらに、十七日付「東京朝日新聞」（三面）の茶毘庵「俳諧燈点頃」は、十四日に角田竹冷宅（聴雨窓）で催された秋声会の「灯ともし講」の記録だが、文末に、

小波子より今夜欠席したる紅葉山人の病状を聞くに及び一座しんみりとして隻語を発するものが無かつた、山人が入院中の吟詠

何はさて命大事の春寒し　　紅葉

病名は胃癌、但し良性と聞いて孰れも纔かに愁眉を開いた、

とあり、ここでも小波の口から「胃癌」であることが告げられているが、これも含めて、如上の報道の驚くべき速さであるといわなければならない。

さらにまた「新小説」四月号（八年四巻、四月一日発行）「時報」欄の「尾崎紅葉氏の病気」には、

漫性胃病の為に久しく自宅に療養せられし同氏は、爾後はかゞしき効もあらざるを以て、去三月上旬大学病院に入院し、主治医入澤博士の試験を受けたるに、同病性は胃癌と診断されたり。然れども幸ひにして性質良好のよしなれば今後の養生よろしきを得ば、格別の大事にいたる事もなからむといふ。

として、先の「二六新報」の福田和五郎宛の書簡を転載している。「胃癌」にして「性質良好」との診断は、紅葉自身の認識であるとともに、周囲の

認知へと広まっていったのである。

さて、退院から十一日後の二十五日、門生が集まって今後のことを衆議する会が、神楽町の泉鏡花宅で開かれた。

門下の星野麥人のもとへ届いた衆議を呼びかける鏡花、風葉連名の二十四日付の葉書は、岩波書店版『鏡花全集』、同『新編泉鏡花集』に未収録のため、左に全文を写してみる（この逸文については、吉田遼人氏からご教示いただいた）。

先生の御病症は御存じの事、それに関して衆議を致度義有之候間二十五日午後一時より神楽町二丁目二十二番地泉方まで相違なく御集会被下度候也

二十四日　　泉　鏡　花

（三十六年三月）　　小　栗　風　葉

（星野麥人「手紙もの語／泉鏡花（下）」「木太刀」三十八巻七月号、昭和十五年七月二十日。（　）内は原文）

「手紙もの語」には、これも含めて七通の鏡花書簡が紹介されているが、うち右の書簡は「紅葉先生御発病後のもの」との麥人の自解がある。

この文面からすると、門生のみの「衆議」が行われるごとくであるが、泉鏡花の「年譜」（岩波書店版『新編泉鏡花集』別巻二、平成十八年一月二十日）にも記したように、紅葉の「十千万堂日録」によれば、二十五日の当日はこの席へ紅葉自身も加わって、結果のちの『換菓篇』に具体化される門生の献呈作品集の相談となった（『換菓篇』については、後節に詳しく述べる）。

とすると、当初は門生のみの「衆議」の予定であったが、この会合のあることを知った紅葉が、みずから参加を申し出ての会議になった、というのが正しいのかもしれない。なお、その晩、鏡花、風葉、春葉、秋聲のいわゆる「牛門の四天王」が神楽坂常盤亭に会し、師の紅葉を招いたが（おそらくは退院祝いの席を設けたか）、体調すぐれず、出席を見合せたことも「日録」によってたしかめられる。先の福田和五郎宛書簡の「当分百事の累を抛ち」、「静養第一に心掛可申」という紅葉の言葉は、なかなか実行に至らなかったというべきであろう。

さらに退院後の動静で注目すべきは、「二六新報」紙上に紅葉編の「不養生誡」の連載があったことである。門生の「衆議」のあった前日、三十六年三月二十四日付（三面）に載った「引」に、

吾疾重からば、唯重くてあるべし、死なば、吾唯死にて已むべきを、夢の鶯徒に放ちて、故に人驚かさんとせしこそ、浅慮の至や、達人の笑を愧づ。然れども、さすがに哀と思ふ方よりは、朝に書を寄せ、夕に物を饋り、頻々として慰問を承く。（…）日ごろの好を茲に懐ひ、四十の命を盛と惜み、うれしさは今、逝く水の流を追ひて、厚き志を運び、深き情を通はす。かゝる人の世、一日も在りて楽しと、手づから牘毎に数行の誡を写して、病中やゝもすれば不養生の誡と為し、又別に所欠惟一死にして、平生万事足の末期を慰む。紅葉山人

〔圏点・傍点は原文〕

と記すごとく、病床に寄せられた知己の見舞の書牘を自ら写して、「不養生」の「誡」とするものであった。

この内容については、すでに田中励儀氏（「小栗風葉「手梏足桎」と〈換菓篇〉―自筆原稿と「二六新報」から窺えること―」「同志社国文学」八十一号、平成二十六年十一月二十日）にも言及があるが、以後四月二十四日まで全十二回のうちわけを示せば、以下のごとくである（各日とも三面。四月六日のみ三面と四面。各書簡に付された番号は省き、名前の表記は原文のまま）。

3月24日　相模松林村 津田氏、下総印西 富井氏、小田原 小杉天外君
3月25日　榑正町 堀野文祿君、猿楽町 曾根氏、西片町 岡田虚心君、駿河台 夏葉女史、大坂 加賀氏、四谷 隠士某
3月28日　名古屋 杉野氏、西京 相良氏、逗子 浦香雨君、上根岸 幸堂得知君
3月29日　大阪 齋藤松洲君、四番町 武内氏北堂、西戸部 同情生
3月31日　本所 渡邊氏、四谷 大町桂月君、越後中魚沼 村山氏、小石川 関屋氏
4月1日　芝公園 竹内氏、新潟市 叔母横尾氏、福岡市 福岡氏
4月5日　神田 角田竹冷君、京都 中山白峰
4月6日　但馬関宮村 水垣氏、日本新聞社 神谷氏、門下 北島生、京都 宮島氏
4月15日　小川町 依田学海翁、大阪 加賀氏、上総茂原 星野氏
4月21日　下六番町 野口寧齋君、牛込北榎町 寺田氏、築地 齋藤氏
4月22日　小石川表町 徳田秋聲、牛込納戸町 小栗風葉、牛込若宮町 半井桃水君
4月24日　牛込喜久井町 田中氏、石見浜田 田中夕風、神田三崎町 上村売剣君、麻布簞笥町 篠原嶺葉

紅葉の「手記」した書牘は、胃癌の告知を受けたことが報じられて以後に寄せられたもの都合三十九通に及ぶ。「君」と付いたのは知友、文壇関係者であり、門生には（女弟子の瀬沼夏葉を除いて）敬称が省かれているのでおのずと区別できよう。

「氏」とあるうち、「十千万堂日録」や紅葉書簡に名のある者では、病床に多くの進物をもたらした下総印旛の富井宗之助、写真仲間「写友会」の曾根真文、二通を写した大阪の加賀豊三郎（号翠溪。後述、山里水葉の「十千万堂日誌」の所蔵者）、名古屋の杉野喜精（銀行家、旧友和達陽太郎・瑾夫妻の姻戚）のほか、武内桂舟の母堂（みせ）、叔母横尾フサ等の婦人まで、各地、多岐に亙っており、その内容をいちいち紹介するに堪えないが、大きく次のように分類できる。

各所の御籤、易断の結果を報ずる者（寺田氏、武内氏北堂、北島春石、徳田秋聲、篠原嶺葉）、療薬を紹介する者（築地齋藤氏、本所渡邊氏）、医師や鍼灸師の紹介（大町桂月、小石川関屋氏、芝公園竹内氏、福岡市福岡氏）、牛乳の飲用を奨める者（叔母横尾氏、半井桃水）等である。文学者では、「海にても山にても、そは御随意として、とにかく田舎に居を移し給はん事」を切望する天外、「かたまりて瘤も芽をふく柳哉」の句を寄せた得知、もとより漢文書簡を認めた学海翁、五言律詩を呈した寧齋等がいる。

ここに写されている紅葉への来簡は、当時の新聞読者に、病状を案じる諸家の心遣いを知らしめる貴重な情報であった。その往来の様相を確認できるもの（例えば、大阪加賀氏、野口寧齋、依田学海のものなど）があり、また門生の書簡も含まれていて、師弟関係の具体的な把握が可能となる。

「不養生誡」は、紅葉の「引」のみならず、全十二回の連載の全体を見てはじめて当時の紅葉のより精しい様態を窺いうるのである。

これまで見てきたように、紅葉最晩年の動態の把握を容易ならしめたのは「十千万堂日録」や書簡など、紅葉側の資料であったが、これに加えて「不養生誡」の連載は、諸家の紅葉「宛」書簡を読むことができる点に大きな価値がある。当時紅葉のもとに寄せられた見舞の手紙は数知れぬほどだったに違いないが、その中から不養生の「誡」となすべきものを抽出し

て示す、という紅葉自身の選択が施されている点からも逸しがたい資料だといえる。

のちに逝去の様子をたしかめる節で改めて述べるが、「入社之辞」にも明言されていたように、「非文学的新聞」たる「二六新報」が引請けた役割は、新たな創作を世に問うことであるよりも、「病骨」の文学者紅葉の末期の動静をつぶさに伝えるところにあったのである。

四　晩年の旅行

先引、三十五年九月の「読売新聞」退社の社告の「閑地に就かるゝことゝなりたり」とは、以後紅葉の生活の第一が、作品の執筆ではなくして、病気の療養であることを宣したに等しかった。事実、晩年の旅行のほとんどは、「閑地」での「療治」を目途とするものであった。

紅葉と旅について、石橋思案は「煙霞癖の紅葉山人」（「真菰日記」「太陽」六巻九号、明治三十三年七月一日）と云い、江見水蔭は「旅行嫌ひの紅葉」（「紅葉と江の島」『硯友社と紅葉』改造社、昭和二年四月三日）と言っている。同行することの多かった硯友社の僚友二人の見解は全く対照的であるが、在世中「悪二停車場一記」（発表は歿後の「新潮」五巻一号、明治三十九年七月八日）を書いているほどの紅葉は、やはり水蔭の言にしたがって「旅行嫌ひ」とせざるを得ないだろう。

しかし「旅行嫌ひ」とはいえ、紅葉三十六年の生涯になした旅は決して少なくはない。

かつて柳田泉のまとめた旅行の一覧（「解題」中央公論社版『尾崎紅葉全集』第九巻、昭和十七年九月十五日）にしたがって、以下に示せば（仮に番号を付し、行先、同行者の不足を補う。人名再出は号のみ。明治を略す）、

[1]	十七年七月	江の島行（石橋思案・池田研池同道）
[2]	十八年　夏	厚木、大山（丸岡九華同道）
[3]	二十二年四月	湯河原（巌谷小波同道）
[4]	二十二年八月	大阪行（単身）
[5]	二十三年四月	江の島行（思案・川上眉山・江見水蔭・小波・佐藤黄鶴・高階柳蔭同道）
[6]	二十三年八月	腰越行（小波・眉山・水蔭同道）
[7]	二十四年八月	奥州地方（単身）
[8]	二十五年　夏	神戸行（中村雪後同道）
[9]	二十六年二月	熱海（思案同道）
[10]	二十六年四月	月ヶ瀬、吉野（小波・大橋乙羽・水蔭・雪後同道）
[11]	二十六年十月	京都行（単身、帰京は泉鏡花同道）
[12]	二十六年十一月	江の島、片瀬行（思案・水蔭同道）
[13]	二十九年七月	片瀬行（小波・思案・広津柳浪・門生等同道）
[14]	三十年十一月	片瀬行（雪後同道）
[15]	三十二年六月	塩原行（単身）
[16]	三十二年七月―八月	赤倉、新潟、佐渡（単身）
[17]	三十三年五月	潮来（小波・思案・水蔭・眉山・武内桂舟等）
[18]	三十四年五月	修善寺（単身）
[19]	三十四年六月	助川（新聞雑誌記者連、泉斜汀同道）
[20]	三十五年五月	成東、銚子（門生等）
[21]	三十五年七月	房州（写友会連中）
[22]	三十六年四月	銚子（家族、門生）

以上、生涯に都合二十二回を数えることになるのだが、この他にも諸書によってこれを補いうるので、次に掲げてみる（↑の下が典拠）。

(1)二十二年（カ）　箱根行、環翠楼泊（思案・眉山・林田亀太郎同道）↑水蔭「紅葉と箱根」前記『硯友社と紅葉』／内田茜江「箱根と紅葉水蔭」『明治文学逸話』女性時代社、昭和十七年十月十五日

(2)二十七年七月　日光（思案同道）↑「日光二人案内」

(3)三十年八月　仙台行、帰途飯坂温泉花水館泊（単身）↑野崎左文「飯坂温泉に於ける紅葉山人の逸話」「愛書趣味」三年四号、昭和三年六月十日

(4)三十三年一月　銚子行（和田垣謙三・長田秋濤同道）↑「時報」「新小説」五年三巻、明治三十三年二月二十五日

(5)三十三年三月（カ）　千葉八幡行（秋濤同道）↑「文壇消息」「ふた葉」三巻二号、明治三十三年三月三十日

(6)三十四年七月　大磯（安田善之助邸）行（千葉掬香・伊臣真等同道）↑「十千万堂日録」

(7)三十四年十二月―三十五年一月　京阪地方（岡田虚心同道）↑「十千万堂日録」

(8)三十五年三月　鴻巣（原口春鴻郷里）行（単身）↑「十千万堂日録」

こうして、近郊のものも含めて三十におよぶ「旅」は、また「文」として実を結ぶこと当然であって、[1]は「江嶋土産滑稽貝屏風」となって紅葉の文業を開き、[6]は「新腰越状」、[10]は「旅の記」、[12]は思案、水蔭との合作「観潮記」、[13]は「沙地浪宅に遊ぶ記」、[15]は「金色夜叉」の「続続（壱）ノ二」に活かされ、[16]は、いうまでもなく「煙霞療養」、[18]は「修善寺行」、[22]は「銚子記行」によって、それぞれ旅行の内容を窺うことができる。

右の一覧を見ても明らかな通り、三十五年以降、かつての硯友社同人を中心とする僚友との旅行は絶えて無くなり、行楽ではなくもっぱら療養のための旅行となるのである。

友人との紅葉本来の旅行の最後は、(7)の虚心岡田朝太郎同道の京阪行であろう。三十四年歳末の二十九日に東京を発って大阪に向った。同行岡田は刑法学者、帝国大学教授で「三面子」の別号も持つ川柳の大家であったが、このころ硯友社の同人では最も気の合った人物だった。正月の大阪滞在中には、たまたまこれも大阪在住の兄の家に来ていた徳田秋聲を呼んで、金尾文淵堂主人種次郎と三人で会食したことが、秋聲の『思ひ出るまゝ』（文学界社、昭和十一年四月二十日）の「大阪の義太夫」の章に記されている。秋聲によれば、紅葉からの葉書を受取ったので、北浜の旅宿を訪ね、金尾種次郎と三人で千日前の「みどり」という小料理屋で会食後、勧工場の店頭で自作『後の恋』（春陽堂、明治三十五年一月一日）の並んでいるのを教えられ、紅葉が東京への土産物を買ってから別れた、という。

この旅行の帰途、名古屋に下車して大喜多寅之助らの旧友と歓談する予定のところ、風邪をこじらせて扁桃腺炎を引起したためそのまま帰京することにし（一月十一日付大喜多寅之助宛書簡）、一月八日の夜行で発って、九日の朝九時に新橋へ着いた（岡田は十日に帰京）。

続く(8)三十五年三月の鴻巣行は、晩年の門人原口春鴻の郷里への旅である。

原口春鴻については、拙稿（「泉鏡花「年譜」補訂（十一）」「学苑」八六二号、平成二十四年八月一日、および「泉鏡花と演劇」『泉鏡花素描』和泉書院、平成二

十八年七月二十五日）に記したことがあり、詳細はこれに委ねたいが、本名を豊秋といい、明治三十四年七月二十一日に入門を乞い、三十一日に出身地鴻巣にちなみ春鴻の号を与えられた門生で、衆議院議員を務めた長島隆二の末弟である。

「十千万堂日録」によれば、三月十九日に春鴻が打合せに来て、二十一日に出発、二十五日には「原口氏兄弟と外に出入の男及小童を従へ写真機二具と小銃とを持ちて荒川に遊ぶ」とあるので、写真と銃猟の遊興も含めた旅行だったことが判る。二人乗りの俥一杯の原口長島両家からの土産を携え、当日十一時に鴻巣を発って、一時に上野着、帰宅したのは午後二時であった。

三十六年に入って、[20]の成東行が療養のための旅の最初である。「金色夜叉」（続々の続篇）の連載が四月一日から五月十一日まで断続掲載されている途中の四月二十九日、胃の拡張を覚えた紅葉は三十日に長与胃腸病院で診察を受け、五月二日、三日、五日、九日と通ったが、思わしからぬ結果となり、上総成東の冷泉への入浴を奨められた。十日分の薬をもらい、斜汀同伴で上野を発ったのは十四日の午前である。

成東鉱泉は、それほど古い温泉ではなく、明治三十年六月の総武鉄道銚子線成東停車場の開業に伴い開発掘削し、湧出した鉱泉に浴する旅館「成東館」が開業したのは三十四年五月、あたかも紅葉の赴く一年前のことだった（成東町編刊『鉱泉旅館「成東館」物語』平成十四年〔刊行月日、記載なし〕）。後年「停車場より六町にして波切不動あり奇巌怪石嶄然屹立し懸崖の頂上朱欄新緑と相映ずるの光景頗る美観なり其崖下に鉱泉湧き温泉旅館あり成東館と呼ぶ」（茶毘庵「九十九里浜」「東京朝日新聞」明治三十九年八月六日付・六面）と紹介されている。

紅葉自身「読売新聞」（明治三十五年六月十七日付・一面）に「上総成東より」の書信（十五日付）を寄せて旅の様子を報じているので、抄出しながら到着までを記してみると、「十二日午後二時本所発車にて三時過千葉着」、「千葉にては吾妻町なる愚仏子の借宅庵に入りて一夜を明し」、「午後三時雷雨の中を暇乞して発足。一時間余にて当地成東館に着」とあり、成東の前に千葉の秋聲会の俳友瀧川愚佛宅に一泊していることが判る。「病中は茶を断ち、間食を禁じ候へば、此間の悶々謂ふべからず、幾度も湯に入りては直に上り、居れば腹のみ撫廻し候て、何と無く裏侘しく罷在候」とあり、社交家美食家の紅葉にとって療養の旅はよほど辛いものがあったろう。三日目に風葉、春葉、鏡花の三人が到着、さらに加賀豊三郎（翠溪）が訪れ、ともに銚子に遊んで、十九日に斜汀、二十日に春葉がそれぞれ先に帰り、二十一日、十二時三十九分発の列車で、残った鏡花、風葉の二人を伴って帰京、四時半に帰宅した八日間の旅であった。

この旅行に関しては、同行した泉鏡花がのちに生前未発表の小説「新泉奇談」（全七十章。執筆は成東行の翌月明治三十五年六月頃と推定）をものし、さらにこれに基づき、逗子滞在期に初の書下し戯曲『愛火』（春陽堂、明治三十九年十二月十日）の舞台としたことで知られる。数少ない旅の体験を積極的に創作の糧として作品化してゆく鏡花にくらべて、師の紅葉には、もはやその気力も体力も残っていなかった。

[22]の銚子行は、三十六年六月の「新小説」（八年七巻、六月一日発行）の「時報」欄に、

▲尾崎紅葉氏　の病状は目下軽快なる方なり。氏は四月下旬より下総銚子に保養せしが、帰来執筆及び接客を避けて、自宅に静養せらるゝ由

と報じられているもので、その旅程は、

明治卅六年四月二十三日午前八時五十分出発。日麗かなれども東風烈しく、寒気膚に透る。寒を怯るゝ病胃は、擣くが如く痛みて止まず。懐炉を抱きて、俥に上る。

から始まる「銚子記行」に述べられている。この紀行は、十時の発車以降、停車場ごとの景情を記しつつ、感懐を句にしているが、総武鉄道銚子線の路線は同じなので、前年滞在した成東の項には「曾遊の地の荒涼を憐む」とある。また「佐倉にて中食すとて、家人の折詰取出すを覗きて、／燦として春の花有りちらし鮓」とあるごとく、喜久夫人と次男夏彦（生後十一か月）を伴っていたが、家族を連れての旅行は生涯のうちこれが最初にして最後であった。銚子に着いたのは午後二時十五分、町を抜けて「二時卅五分暁鶏館に着。風益勁し」とあり、末尾に「浴前体量を測るに、十一貫八百九十目」（約四四・六キログラム）とも記されていて傷ましいが、到着以後のことはほとんど省かれている。

この紀行文の「魅力」について、岡保生氏が「紅葉の公にした著作からはうかがえない、夏彦の父であり、きく子の夫である人間尾崎徳太郎の姿が見えかくれするところにある」（「解題」岩波書店版『紅葉全集』第十一巻、平成七年一月二十六日）と述べているとおり、短文ながら家人へのまなざしをかいま見せている点に他の紀行文とは異なる特徴がある。

銚子滞在中には加賀豊三郎宛（四月二十四日付、二十七日付）、安田善之助宛（二十九日付）、樺島信太郎宛（同）、佐佐木信綱宛（三十日付）、岡田朝太郎宛（同）など発信が多く、「銚子記行」の記述を補うかのごとく、滞在中の様子をとりどりに伝えているが、喜久夫人の兄樺島信太郎宛には、

夏彦おとなしく候へども手が掛り閉口に御座候（…）廿六日の晩景鏡花風葉春葉秋声の四名並に京都より見舞の為出京候白峰を加へ袖をつらね野菜をかつぎ曳々と押寄せ来り昨今は夜昼ともに大にぎやかに御座候

とあって、四天王のほか、京都からの門人中山白峰を加え、家族門生打揃っての「大にぎやか」な滞在となった。帰京は五月早々、佐佐木信綱宛では一日、岡田朝太郎宛では二日と報じられている。

［付記］

繁簡のよろしきを得ず、稿の半ばで紙幅を越えてしまった。このあと、「見舞人のかずかず」「白屈菜の採取と投薬」「『換菓篇』の企画」「臨終」「逝去の報」「解剖」「高村光太郎と紅葉」「葬儀の模様」「紅葉祭という催し」「歿後の出版物」等の項目を考えているが、資料の紹介も含まれているので、数回の稿を継がねばならないと思う。時間を要することご寛恕願いたい。

なお、引用文の仮名づかいは原文のままとし、字体は概ね現行の印刷文字に改め、読解に必要なルビを残した。傍点、圏点は概ね原文のままとした。

本文中にお名前を記した方々のご教示のほか、資料の調査に関しては、国立国会図書館、日本近代文学館、青山学院大学図書館、本学図書館近代文庫のお世話になった。併せて深謝申し上げる。

（よしだ　まさし　日本語日本文学科）